

## 歴史における行為の説明

—Causes, Motives, Dispositions, Reasons, Laws—

神川正彦

### 前 書

今日、諸々の科学に対する批判的反省が特に分析哲学系の立場からなされていることは、もはや周知のことと思われる。所謂論理実証主義の科学理論がラディカルに提示した「物理学主義」の見方が、その後、生物学・心理学そしてさらに社会諸科学及び歴史科学へと押しひろめられるとともに、実証主義的批判に対する反批判がよびおこされて、諸々の研究成果が示されて来ているわけである。やや単純化してドラマティックに言えば、分析哲学左派と右派との争いとも言えることが出来よう。かかる風潮を背景にして、歴史科学への批判的反省も既に一応の成果とその問題性をあらわにしていると言いうことが出来る。<sup>1)</sup>

一般に歴史科学への批判的反省の試みを批判的歴史哲学と言いうわけであるが、その中心的な問題の一つが歴史的解释 (historical explanation) の問題と言われるものである。簡単に言えば、歴史的出来事の科学的説明とい

うものが如何なる原理と構成よりなっているかという問題である。言うまでもなく、歴史的説明の一般的な問題のなかに、人間行為の歴史的説明に関するヨリ特殊な問題がある。それが一般的な歴史的説明の問題のなかでやや特殊な位置をしめるのは、分り易く言つてしまえば、人間行為は単なる外的な出来事ではなく、諸々の内面性を有する事象であるからなのである。歴史的説明が求める人間行為の説明の問題とは何かという点については、R・G・コリングウッドの陳述が簡潔な手引を与えているように思われる。「自然科学者が『何故にリトマス試験紙が赤くなるか』と問う時は、『いかなる場合に、リトマス試験紙が赤くなるか』ということを問うている。だが歴史家が、『何故にブルータスがシーザーを刺したか』と問う時は、『シーザーを刺すように決心させたその思想は何か』ということを問うているのである。歴史家にとってその出来事の原因は、その人の行為によってその出来事が生じたその当の人の心のなかの思想を意味しているのである」<sup>2)</sup>

さて、この陳述から大体二つの問題への手引が示されているように思われる。第一は、人間の行為の説明には人間の思想とか更に挙げれば意図、欲求、信念、計画などへの言及が含まれざるをえないこと、そして第二は、かかる事象への言及による説明において、かかる事象が原因と解されてよいかどうかという問題である。実際このような問題をめぐって、実証主義的理論（たとえば、C・G・ヘンペル、K・R・ポッパーなど）によって火蓋をきられた歴史批判が色々な観点から追究されているのが、分析哲学系の歴史理論研究の現状だということが出て来るようである。

おおよそ、分析哲学系の理論が示す人間行為の歴史的説明の問題の中心点は、私が副題で列举したような語で言いあらわされるものと言ってもよいように思われる。それ故、その他の多くの重要な問題は故意に無視されたり軽じられたりしているわけであるが、<sup>3)</sup>今回は私もかような多くの問題面を一応捨象して、Causes, Motives

Dispositions, Reasons, Laws. など示される問題面に考察を限ることにしたいと思う。これは、それらの諸々の事態をまず解明することが、他の諸々の問題をとくために必要だと思われるからでもある。

さて、このような課題はこれら諸々の事態の相互の關係如何ということが最も大きな中軸をなしているであろうことは、自ら推察されるところである。従って、かかる關係をあきらかにするには、以下のような筋道を通じて行くのがその自然の順序であろう。つまり、第一は、既にコリングウッドの手引が示しているように、因果的説明 (causal explanation) 即ち原因による説明と非因果的説明 (non-causal explanation) とがわかれたる根拠は何かという点であろう。このような根拠が示されてはじめて、他の事態の關係を問うことが出来る。だから、第二は、Motives と Dispositions と Reasons の關係如何ということになる。その結果、第三には、行為の歴史的説明の、かかる問題面からみた全体的な構成が浮び上って来て、それをあきらかにすることが出来るであろう。そして最後に、かくして描き出された説明の構成を法則の問題と関連づけて反省することによって、本考察の展望を与えたいと思う。大体かかる道順に従って、一応の解明の筆を進めよう。

# 一 因果的説明と非因果的説明の区別の根拠

そもそも原因とは何かとか、因果的説明とは何かなどという問にまず直接に答えようとすることは、問題事態を予め理論的に割切ってしまう結果に陥ってしまうように思われる。本来原因とか理由などという言葉は漠然として多義的であり極めてゆうずうがきくように日常使用されているからこそ、あらかじめその意味をハッキリさせることは却って任意な概念規定に陥ることになるわけである。実際我々は論ずべき当のことばを明確にしなけ

ればならないのに、他方勝手に明確にしてはならないというディレンマに直面せざるをえないのである。ではどうしたらよいだろうか？

私は、たとえばP・ガーディナーのように、説明の表現形式への注目から、我々の考察をひもとく鍵をひき出してみたかどうかと考えてみた。彼は大体次のように指摘している。物理的な出来事に関する説明は諸々の因果法則を仮定し出来事間の観察された規則性によって分析されるのであるが、歴史の場合には日常生活の場合と同様、それとは異なる様な説明形式でなされる。その表現形式は例えば「xはzをなしとげるためにyをなした」とか、「xはzをなしとげようと欲した。それ故にyをなした」とか、また、「xはzを求めたが故に、yをなした」などというものであると<sup>3)</sup>。このような表現形式のうちで「……の故に」(because)形式を代表とみて、その形式で我々の問題のモデル・ケースを構成してみても、かかるケースを前提した上で、我々の問題をあきらかにしてみたかどうかと考えてみたわけである。

既に引用したコリングウッドの例に示唆されて、私は「なぜブルータスがシーザーを刺し殺したか」という問に対する、もっとも単純な四つの典型的な答え方を想定してみた。ブルータスがシーザーを刺し殺したという行為について、一応、原因と動機と性向(disposition)と理由の各々による四つの説明の仕方があるとしよう(勿論、私は四つしかないなどと決して考えているわけではないが)とすると、そのモデル・ケースを次のように言いあらわしてみたらどうかと思う。

(行 為) <sup>④</sup>ブルータスがシーザーを刺殺した。

なぜならば、(原因) 彼はシーザーを刺殺するように彼の同志によって強要された。

(動 機) <sup>⑤</sup>彼はシーザーのような暴君をにくみ、彼を刺殺するよう決心した。

①(性) 彼は自由を命にかえても愛する人であった。  
 ②(理 由) 彼はローマ共和制をまもるためにはシーザーが刺殺されねばならぬと信じた。

今回はなぜこのようなモデル・ケースが構成されるかという理由を正面から論ずることはやめ、むしろかかるモデル・ケースを想定した上で我々の問題を追究して行くことにしよう。そうすれば自ら逆にその理由もあきらかに becoming 来ると思われるからである。

一般に言って、行為には外部に向って展開していくものと、思考として内部化されるものと、二つの種類があると言われる。<sup>5)</sup> 簡単に言えば、外的行為と内的行為ということが出来るであろう。歴史的行為と言われるものは言うまでもなく外的行為に属する。今、ブルータスがシーザーを刺殺しようと考えただけでは決して歴史的行為とは言われない。現実にはシーザーを刺殺し、その現場に居れば見聞出来る行為となつてはじめて、歴史的行為となりうる不可欠の条件をみたすことになるわけである(勿論、必要にして充分な条件でないことは言う必要はないであろう)。かような歴史的行為について今回は一応四つの説明の仕方をティピカルに打出してみ、その関係を究明してみようとしているわけである。

さて、原因による説明を因果的説明とするならば、動機や性向や理由による説明もまた各々、動機付けの説明(motivational explanation)、性向的説明(dispositional explanation)、理由付けの説明(rational explanation)と言うことが出来るであろう。とすると、後の三つの説明が因果的説明と如何に関係するか? この問題が、今日の分析哲学系の歴史理論を大きく分けるポイントになっていると言つてよいと思われる。まず第一に一方の極には、因果的説明の決定的優位を主張しそのモデルに他のものを従属せしめようとする考え方があつた。そして他

方の極には、因果的説明と異なる他の説明の独立を宣言する見方がある。その結果、この二つの極をとりもつような、弾力性にとんだ折衷的な態度がうまれて来るわけである。それは言わば左派と右派との対立を背景にしていられる中間派の如きものである。

第一の考え方は所謂実証主義的な理論によって代表され、人間行為の説明もやはり演繹モデルに従ってなされる因果的説明の論理に従わねばならぬとするものである。たとえば、C・G・ヘンペルは動機付けの説明や、また理由付けの説明の一つであると考えられる目的論的説明も、論理上或は形式上決して因果的説明とことなるものではないと言い、説明されるべき事柄が一般法則に包摂されるという決定的要請をかなえないものは、健全な説明たりえないと主張するのである。<sup>6)</sup> 目的論的説明の問題はさておき、動機付けの説明に限ると、かかる説明を因果的説明の一種と考える見方はJ・S・ミル以来極めて普通の見方ではあったが、このような見方をあらたに「説明の論理」によって基礎づけようとしたところに、かかる実証主義的理論の意義があると同時に、かかる理論への反批判が生れる結果となったのである。

かかる反批判が示す他方の極が、因果的説明と異なる他の説明の自律性を基礎づけようとする見方であった。その典型がG・ライルの示した性向的説明の原理である。ある動機からなされた行為を説明することは丁度、「石が当たったから、ガラスがこわれた」というのとは異なり、「ガラスがこわれやすいので、石が当たった時、ガラスはこわれた」という説明の仕方と類似している。この「こわれやすい」というのが物の *disposition* を示すものであり、このガラスに対する一般的な準法則命題 (*law-like proposition*) を述べていると言うのである。<sup>7)</sup> 謂わば行動主義的な前提に立つライルにとっては、因果関係とは出来事と出来事との間におこることであり、動機は本来出来事ではないので原因とは考えられない。しかし、内的な動機によって外的行為を説明することは、彼の行

動主義的前提に反することなので、性向の説明の原理が強く主張されたわけである。それはともかく、ライルの考え方はほぼ三つの点で新しい見方を打出したものと言うことが出来るであろう。第一は、因果説明ではない説明の原理を強調すること、第二は、動機付けの説明を因果的説明ではなく性向の説明に属せしめたこと、第三は、一般法則命題に対して準法則命題の意味を示したことでであろう。だがはたしてライルのように単純にわりきって考えることが出来るのであろうか？

ヘンベル的な考え方やライルのな見方の規定的な割切りに対して、もつと具体的な實際に即しようとする、折衷的と言うか、弾力性のある考え方がうまれて来るのも、また自然の成行ではなからうか？ 勿論、前二者の問題の核心は、説明の論理的な構成にあり、後者はむしろ「認識論的」な構成にむけられているから、問題面が異なると言われるかもしれない。たしかにかように限界づけることは出来る。だが、このような形式的な限界設定で割りきれないところに、むしろ本当の問題がひそんでいると考えられる。さて、かかる中間派的な考え方は、原因、動機、性向、理由などの語で代表されるような説明の相互の関係を一方的な規定に従ってわり切るのではなくて、それらの相互関係の言わば柔軟な相互移転性とも言うべきものに注目しようとする考え方と言うことが出来るであろう。その代表とも言うべきものが、W・ドレイの考え方に示されている。行為者の行為する理由を問う説明は、一般法則の下に包摂することによってなされるのではなく、或る種の一般性をもつ行為の原理によるのだと言う。だが、このような説明は、歴史家が行為者の観点 (the standpoint of an agent) に立つ場合であって、ある行為を法則の下に包摂せんとする時は、行為の傍観者或は操り手の観点に立つ。性向の説明なるものも実は傍観者の観点に立つものであるから、因果的説明と区別するのは實際上無理がある。つまり、性向的説明となるか因果的説明となるかは、探究のコンテキストによるのだと言うのである。探究のコンテキストによ

って、理由もまた原因たりうるし、原因もまた理由たりうる。動機についても同様である。<sup>8)</sup>

W・ドレイが探求のコンテキストと述べた点を、R・ピーターズは一般性のレベルという観点からつかんでいる。<sup>9)</sup> 問題探究においてコンテキストとレベルは表裏の關係にあるほど切っても切れないものであるから、同じような柔軟性のある考え方を示しているものと言うことが出来る。

以上のように三つのタイプの考え方に一瞥を与えてみる時、このこみ入った問題事態に光をあてるには、出来る限り弾力性ある考え方をとらねばならないのではなからうかという見透しが既に示されているように思われる。つまり、かかる事態の相互移転性ともいうべきものをハッキリとめた上で、その相互の区別の裏づけられる動的根拠を掘り下げる態度がヨリ具体的な見方だと考えられるのである。このような手引に導かれて、我々のモデル・ケースをあらためて見直してみよう。

もはや繰返すまでもないが、今当面の問題は因果的説明と他の三つの説明とがどのような根拠で区別されるかということであった。順番を裏返してまず理由による説明から考えてみよう。

(一) このモデル・ケースに「ねばならぬ」とか「ために」というような表現が特に用いられ、義務的なものとか目的的なものをあらわそうとしている所以は、言わば第一義的、理由による説明というものが、価値的な立場から行為を正当化しようとするところに存すると考えられるからである。<sup>10)</sup> つまり、正当化する理由 (justifying reason) ということである。それ故に言語上から言うと、理由による説明は価値言語 (value-language) がもととなって表現されるところに、その第一義的な核心があると考えられるわけである。<sup>11)</sup> それに対し、原因による説明は「必然的に強制する或は規定する」という事実関係を問うところにその本質があり、それ故、没価値言語



(value-free or value-neutral language) として用いられるところにその第一義的な使用法があると言いうことが出来よう(だから、裏返して言えば、第一義的使用法が転化されて、価値言語が没価値言語として使用されたり、また逆に没価値言語が価値言語として使用される可能性がある所以なのである)。

さて、正当化する理由或は価値言語としての理由の在り方は、本来、行為者が自分の行為を価値的な立場から正当化しようとする営みに、その根をおろしている。現実の人間の行為というものが常にその行為者自身の正当化の過程となされていることから当然なことであろう。だから、歴史探究者の側からすれば、行為者自身の行為の理由をそのまま問う場合には、行為者の観点に立たざるをえない。ということは、行為者自身の正当化する理由を問うという問題のコンテキストに、探究者は自分の問題をしばるということにはかならない。だが、かかる問題のコンテキストは、行為者自身の価値的経験に即する、極めて一般性の低いレベルの問題であることは言うまでもない。従って、学問上探究者は自然と行為者の観点をはなれ、つまり、行為者の経験に即する低いレベルの問題のコンテキストをはなれて、傍観者として或は批判者として、行為者自身の正当化する理由の問題をより高いレベルのより広いコンテキストに位置づけて吟味して行かざるをえなくなるわけである。<sup>12)</sup> かかる吟味につれて、R・ピーターズの言葉をかりれば、<sup>13)</sup> 理由による説明は 'his reason' explanations から 'the reason' explanation へと客観化されて行き、他の諸々の説明へと転化する可能性をふかめるのである。かかる転化の可能性の問題はともかく、以上のような考察によって、理由による説明と普通言われるものがどのような動的根拠によって因果的説明とわかれたるかが、一応あきらかになったと思われる。それを簡潔に整理してみれば、二つの基本的根拠の関連となる。第一は、価値問題と価値言語の線、そして第二は、探究者の観点と問題のコンテキストとレベルの線である。しかも、この第二の線の根拠がさらにふたたび基礎になって、性向による説明と動

機による説明とが因果的説明とわかれたる理由が示されるように思われる。はたしてそうであろうか？

(二) 動機に関するこのモデルでは、にくしみと決心というような、感情的な側面と意志的な側面だけが一応示されているが、一般に動機というと普通内的な行為のすべてがふくまれると考えられる。<sup>14)</sup>そこで、動機による説明と原因による説明との関係は、コリングウッド流に言うくと、内側と外側との関係如何という点に帰することになる。その場合問題となることは、第一は、内側が原因とみられて外側を規定するという考え方が正しいかどうか、つまり、動機による説明は原因による説明にほかならないのかどうか、そして第二は、そもそも内側と外側とを分つことが正しいかどうかという根本問題なのである。

まず第一に、内側が外側を原因付けるといふ考え方が陥らざるをえないと思われる最大の難点は、探究者にとつて見聞出来ない言わば内的な $x$ によって、見聞出来る外的行為がおこされたことを認めねばならぬことである。内的な $x$ という姿なきものに原因をゆだねるのであるから、その因果的説明はどうしても神秘的なものとなってしまうであろう。この難点をのがれるためには、論理的には、探究者が行為者の立場に身をおくことをよぎなくされる。<sup>15)</sup>だが行為者の立場に立つてしまえば、行為者の自覚の光に照し出されるその内的な $x$ は、行為者自身の行為の原因とは言われがたく、まさしく彼の行為の葛藤する諸々の動機でありまた時には理由と解されるものとなる。なぜか？ 結論を先取して言えば、行為者の立場に立つといふことは、行為者の内的経験に即する、極めて一般性のレベルの低い問題のコンテクストに限定づけられねばならないといふことにほかならぬからである。この結論の意味をあきらかにするためには、我々は第二の問題をあわせ考えることが必要である。

コリングウッドのように内側と外側とを固定的に区別することは正しくない<sup>16)</sup>し現実には不可能である。だが、たとえば $L \cdot S$ ・ステビン<sup>16)</sup>グのように両者を一体と考えることも正しくない。そもそも、現実ではわかれたがた

くつけ合っている内側と外側とがわかたれて来る根拠は、行為者の内的経験に即しようとする見方のダイナミックスな方向性にあると言ふことが出来るように思われる。言わば人間の心は、外側と区別出来ない表面をもちながら限りなく深い未知の暗闇をひめる深淵の如きものと言えよう。だから、行為者の内的経験に即しようとする見方はこの深淵のなかにもぐりこみ極めてリアルな微視的世界をさぐろうとする。もはやなんらの一般性をも有しないようなりアルなレベルにまで深まって行こうとする見方——つまり、ヨリ微視的な見方——こそ内側と外側とが動的にわかたれて来る言わば屈折光線なのである。従って逆に言えば、互に矛盾し合う諸々の心理の起伏を捨象して一般性のレベルを逆にヨリ高くのぼって行けば行くほど、外側とは区別出来ない内側を見出し、かかる内側が原因となつて行為を動機づけるという因果関係の視野がひらかれて来る。<sup>17)</sup>しかしそれは、我々が行為者の立場（より詳しく言ふと、行為者自身の反省的立場）を次第次第にはなれ傍観者や批判者の立場へと次第に移行していることにほかならない。内側と外側とを分つもの、そしてその区分にささえられる動機付けの説明と因果的説明の関係の問題も、結局、探究者の観点と問題のコンテキストとレベルに支えられる微視的な見方と巨視的な見方の問題に帰着するわけである。<sup>18)</sup>それ故に、性向による説明についても、かかる見方如何に依じて、自らの動的な在り方を規定されることになる（この点については、動機付けの説明との関連が主なので、次節でとりあげることにしよう）。

以上で一応、因果的説明と他の説明の区別の動的根拠が明かになったと思われる。だがそれはおおまかな区別であり動機と性向と理由の三者の関係があきらかにならなければ、まことに不十分なものであろう。そこで、四者の関係をあきらかにするに先立って、次に三者の関係を一応究明することにしよう。

## 二 動機、性向、理由、その関係

まず我々のモデル・ケースを組合して典型的な関係様式をえがいてみよう。動機付けの説明に対してさらに「なぜか」と問いかけるとすると、次のようになるう。

彼はシーザーのような暴君をにくみ、彼を刺殺するよう決心した。

(一) 彼は自由を命にかえても愛する人であつたから。

(二) 彼はローマ共和制をまもるためには、シーザーが刺殺されねばならぬと信じたから。

(一) によつて性向の説明と連関づけられ、(二) によつて理由付けの説明と連関づけられる。そして更に、理由付けの説明に対して「なぜ」と問いかけるとすると、

(三) 彼はローマ共和制をまもるためには、シーザーが刺殺されねばならぬと信じた。彼は自由を命にかえても愛する人であつたから。

というように、性向の説明と連関づけられ、結局三者の説明の典型的な関係様式が構成されるわけである。私は各々の場合にわけてそれらを考察してみよう。

(一) 動機付けの説明が性向の説明によつて言わばバック・アップされる所以は、前者よりも後者の方がより一般的な命題であり、かかる意味で前者が何等かの形で後者にふくまれる可能性をもっていると考えられるからにほかならない。ヨリ一般的である所以は、内容と見方の両面から充分に了解出来る。両者の説明の内容的中核をなす動機と性向そのものを考えてみると、一般に動機と言われるものは行為の個々の特殊な動機を意味する。それに対して、性向というのはむしろ個々の状況を貫いている行為者のパーソナリティの面をヨリ強く指し示して

いる。つまり、行為者の行為のヨリ一般的なパターンを示すものと解することが出来る。それ故、次に見方からすると、動機による説明というものは特殊な動機の裏をめくるようなヨリ微視的な見方を必要とし、性向というものは逆に為人を総括するようなヨリ巨視的な見方に基づくものと言うことが出来る。別言すれば、前者は益行為者の観点のうちに入って行くことが必要であり、後者は益々行為者の観点のそとに（つまり傍観者の立場のうち）入って行って、行為者のヨリ全体的な在り方を一望のもとにとらえようとすることが要請されるわけである。

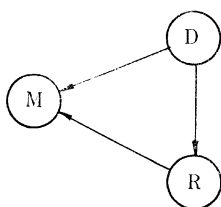
だが、かかる見方にささえられているが故に、両者の説明の在り方は決して固定的なものではない。動機とは directed disposition であると R・S・ピーターズが指摘しているように、<sup>19)</sup> 動機と性向とは現実では分ちがたく結びついているのである。動機というものも特殊で一般性の低いリアルな内的経験のレベルだけに沈滞しているわけではなく、かかる低いレベルから高まって言わば一つのまとまった大きな性格的な力となつて、ヨリ一般的な巨視的な視野のもとにひろがっている。他方、性向というものも傍観者の一望の下にひらかれるヨリ一般的でヨリ外的な全体性格にくみつくされるわけのものではなく、ヨリ特殊でヨリ微視的なものとして行為者を性格づけている。動機づけの説明と性向の説明とは既述せるように、本来逆の視点にささえられ、要するに、前者は行為者の微視的展望のもとにひらかれ後者は傍観者の巨視的展望のもとにひらかれるのではあるが、その動的展開において常に本来の方向とは逆に向う可能性に裏付けられている。その故に、両者はそのダイナミックな現実性において分ちがたいほど深く結びつき、時に相互に転化する可能性を常にひめていくわけである。<sup>20)</sup>

(二) 動機づけの説明が理由づけの説明によつて言わばバック・アップされる所以は、前者をさらに後者で正当化しようとするからにはかならない。正当化する理由とは既述せるように、行為者が自分を正当化するという意

味で、一義的には、行為者の立場にその根元を有していた。それ故、動機づけの説明と理由づけの説明とは、本来的には、特殊な行為者自身の問題のコンテクストにしぼられて、行為者自身が徹視的に自らの行為の根拠をまきぐろうとする点で、その立場を等しくしていると言うことが出来るであろう。その立場では、動機は正当化の理由となり、<sup>21)</sup>正当化の理由が動機となる。その点は、理由づけの説明のモデルにもハッキリよみとれるところである。

このモデル・ケースの記述は実は二つの部分からなっている。つまり、目的観なり義務観なりを示す部分と、「信じた」という彼の信念を示す部分とである。この信念の部分は本来動機と解することが出来る。ただ、この信念なるものが目的や義務などの価値的立場にうらうちされて、正当化の理由づけの説明に属するものとなる。だが、さかさまから言えば、かかる価値的な立場というものが行為者自身の信念となることによって正当化の理由づけの説明が構成されるわけである。理由づけの説明を構成する二つの部分は互に不可欠に補足し合うことによってのみ、行為者の正当化する理由付けの役割をはたすと言うことが出来る。このようにモデル・ケースの構成を分解してみる時、動機と理由というものがいかに密接に結び合っているものが自然と理解されると思われる。その根本的基礎は両者がともに行為者の立場に根ざしているからなのである。

だが、このような同じ立場に基づくにもかかわらず、動機づけの説明が理由づけの説明によって正当化的にバック・アップされる所以は、後者がより普遍的な価値陳述を含むより一般的な原理で裏付けられることを求めるものである故である。正当化する理由とは行為者の立場に立つ自己弁明の契機にほかならぬが、そのため常になんらかの形で普遍性に基づかんとし、その意味で、たとえ偽装にすぎないとしても、普遍的な価値の示す一般性のレベルを昇ってその裏付けを求める。つまり、正当化する理由は行為者の特殊事情にくだるだけのものではな



く、傍観者もみとめるような一般的な価値の裏付けへとたかまろうとするのである。ところで一方、動機づけの説明の方においても、動機というものは行為者のうちの奥深くへと降る方向ではなく、傍観者の視野にひらける一般性のレベルを昇る方向においてとらえられ一般的にその正当さが認められる動機となりうる。従って、かかる方向においても、両者の説明は結局分ちがたく結びつき、時には相互に転化する可能性をひめている。<sup>22)</sup>

(三) 理由付けの説明が性向の説明によってバック・アップされる所以は、理由づけの説明が動機づけの説明と同じ存在根拠にもとづく以上、もはや繰返して言う必要もないであろう。理由づけの説明というものが、このモデル・ケースが示すように、彼の信念の部分のはたらきが必要である以上、性向の示す行為のパターンにふくまれることは言うまでもなからう。しかしながら、理由づけの説明というものがより普遍的な価値陳述によってその一般性をたかめ、しかもそれとともに行為者の立場が傍観者の立場でより客観的にたしかめられる場合。かかる時には、我々の性向の説明のモデルの「自由」などから示されるように、より一般的なパターンの論述である性向の説明と理由づけの説明とは分ちがたく結びつき、相互に転化する可能性を常にひめて来ることも、同じ事情である。<sup>23)</sup>

以上のようにみて来る時、動機づけの説明(M)と性向の説明(D)と理由づけの説明(R)の三者の関係は、その観点と問題のコンテクストとレベルにもとづいて、分れたり結びついたりまた転化したりするものであることを一応あきらかにしえたと思われる。我々は具体的問題に即し、観点と問題のコンテクストとレベルの動的移行に基いて各説明の変様するさまをあとづけることが出来れば、それにこしたことはないのであるが、今回は原理的な見透しで一応満足することにした。

さて、第二節で示した三者関係を図示すると、右のように簡単に示されよう。それが三者の典型的な関係と言  
うことが出来る。かかる典型的な関係において、相互移動のダイナミックスが展開されるわけである。そのダイ  
ナミックスの展望がひらかれるのは、人間の観点と問題のコンテクストとレベルにおいてなのである。

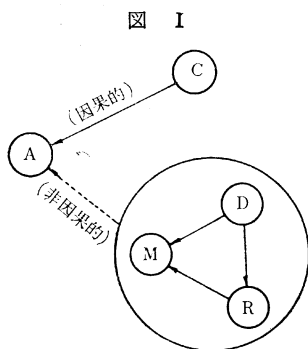
### 三 説明の構成

私は第一節で因果的説明と非因果的説明の区別の根拠を考え、第二節で非因果的説明と考えられる三つの説明  
——動機、性向、理由による——の関係を一応考察して来た。その考察の結論は、かかる関係というものが極め  
て動的なものであるという点にあった。それは裏返して言えば、かかる区別は逆のものに転化する可能性をもっ  
ているということである。実は、その可能性というものは本来、事象の現実性の方にねざしている。これらの説  
明がめざしている問題事象——つまり、人間の認識の瞳が少しもめざしていないと想定されるありのままの事象  
そのもの——というものは、ただリアルな事象過程の流れにすぎない。原因とか結果とかまた動機等と言われる  
ようなものではなく、ありのままの無記の事象にすぎない。さらに一般意味論の術語で言えば、非言語 (non-  
verbal) 世界の微視的過程の展開とその現われにすぎない。かかる事象の流れに対して我々の認識の光がさしこ  
まれることによって、原因とかまた理由とかの言語記号を媒介として、かかる事象の分節がおこる。そして、か  
かる分節が明確な姿を形作るのは認識者の観点と問題のコンテクストとレベルに依じてなのである。<sup>24)</sup>それ故に、  
かかる分節は決して固定的なものではないのである。固定化と動化という二つの相反する方向の間の絶えざる往  
還運動によって我々の認識が展開する。そこで我々は、第一節と第二節で示された動的な区別をもとにして、今



や、むしろ固定化への方向において説明の構成——四つの説明の関係——を考えてみることにしよう。そして後に再びその構成を動的な姿にゆりうごかしてみよう。

今までの考察によって四つの説明がどのように関係して行為の説明となるかがほぼあきらかになっている。その関係をまず簡潔に図示してみよう。図示は固定化をもっとも簡単にあらわすから。



行為に対して因果の説明をしようとする場合には、行為を結果としてその原因が求められねばならない。そもそも原因のない因果の説明は形容矛盾である。

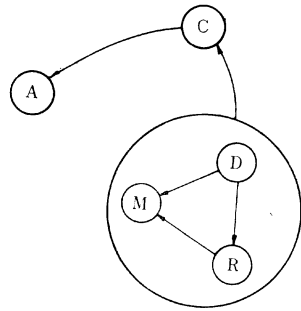
◎ ↓ A はかかる因果関係を示す。ところで我々の考察においては、その他の説明は一応原則的には非因果の説明と考えられた。従って、点線の矢印は非因果的な関係をさし示しているわけである。勿論人によってはこのような見解をとれないことは、一つ一つ指摘する必要もなからう。且つ又、動的な観点からみれば、かかる図示が極めて形式的・抽象的であることは言うまでもない。し

かし、動的に示された区別の相互移転性は本来区別を前提とし、その区別を固定化してみる時、却って簡潔に我に説明の構成の枠組を示してくれるように思われる。

さて、各々の説明を一つ一つとり出すと、たとえその一つ一つが行為の説明の一種の仕方ではあるが、不完全な説明の仕方だと言わざるをえない。これは因果の説明についても同様なのであって、因果の説明だけが完全な説明だと考えるのは、自然科学的な偏見にすぎない。ヨリ充分な説明となるためには、四種の説明が充分に関係し合っていることが必要である。では、どのように関係し合うのであろうか？

文字通り固定的に解釈すれば、動機と性向と理由による説明は非因果の説明なのであるから、行為の説明とし

図 II

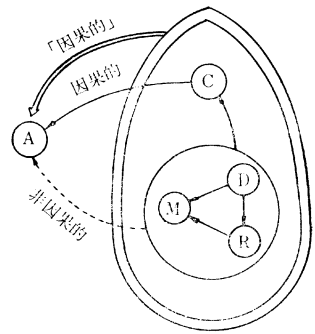


て行為と直接事実的に結びつく通路がないと言わねばならない。(かかる意味で、非因果的關係というのはラショナルな——イルラショナルの面をも含めて——關係だと解してよいかもしれない)従って、事實關係においては、(M)(D)(R)のグループは(C)を迂回して行為へと達する道しか想定出来ないわけである。(念のため繰返すが、今は四者の關係が問題なのであって、個々の説明が単独で成立する問題面は捨象されている)それを図示すると上のようになるう。

あるいは、上記の図を次のようにならべかえてみると、一目のもとにその關係があきらかになるのではないかと思われる。つまり、普通の因果的説明の図式に  $M \cdot D \cdot R$  を代入したものである。普通の因果的説明を分り易い例で言う、今火事がおこった。その原因は煙草の不仕末だとあきらかになったとする。しかしこの場合この原因は直接の原因なのであって、煙草の不仕末で火事が起きるにはその他の非常に多くの条件が必要なのである。煙草が燃えやすいものにふれたこと、だからそこに燃えやすいものがあつたこと。しかし煙草の火で燃えるものが近くにあつたとしても、それが不燃物でおおわれていれば火事にはならないので、その燃えやすいものがさらに家のなかの燃えやすいものにかまれていること。しかしそれのみではない。それをはやく見つければ火を消せる。だから、火がもえる前に見つけなかった家人の不注意がある、等々。因果の連鎖は極めて多様な先行条件に基いて、ある直接の要因が結果を惹起するわけである。

実はそれと同じで、「ブルータスがシーザーを殺した」という行為がおこるためには、限りなく多様な条件がある。その条件は、かような一個の人間行為の説明のためにも、大規模な政治的・経済的・社会的且つ文化的状

図 III



「因果的」と記した——とである。「因果的」という二重円で考える時、先行条件というものが「原因」とよばれるならば、動機も性向も理由もまた「原因」とよぶうるわけである。しかしこのことでもって因果的と非因果的——つまり狭義の関係——の区別が消しさられることを意味しない。

以上のようにみることによって、一応四つの説明の関係を固定的にとらえることが出来るように思われる。この四者の関係がかように連関づけられて、人間行為の説明の構成が描き出されうるわけである。しかし、このような説明の構成は決して固定的なものではない。いや、本来固定的ではないが故にこそ、固定化することによってその構成を描き出しうるが、その構成が動的にとらえられてはじめてその生きた姿をあらわすのである。今迄多くの人々がこの四者の関係をあきらかにしようとしながら、一方ではかかる概念の勝手な限定によって問題を割切り事足りとなし、他方ではその関係の相互移転性を指摘するのみにとどまっているように思われるのは、結局、固定化的方向と動化的方向とを充分に自覚してとらえていなかったからだと思われる。つまり、論理的問題と「認識論的」問題との相関的把握が不可欠なのである。図IIIの示す四者関係の二重構成を理解した上で、そ

況さえ含むようになることは周知のことであろう。私はかような多様な先行条件のなかに、動機と性向と理由とをふくめしめることが出来ると考えているのである。とすると、我々の図は上のように二重化されると解される。つまり、二重円のグループからなされる行為の説明は全体的にみて、「因果的」だと考えられるわけである。従って、因果的という言葉の意味が根本的にみて二義あることを我々はハッキリと認めなければならぬ。狭義の因果的と広義の因果的——これを私は括弧をつけて

の動的根拠に目をやる時、その移転性は明確な構成の下で把えられよう。

さて、図Ⅲのように説明の構成が固定化されて描かれるその段階では、探究者は既に行爲者の立場をはなれて傍観者或は批判者の立場にあることを我々は知らねばならない。従って、この先行条件としての動機・性向・理由はヨリ巨視的な問題のコンテキストのうちにおかれており、一般性のレベルを上昇する方向において把えられるよう余儀なくされている。性向は言うまでもなく、動機も行爲者の心の奥深くへとさぐられることよりも、むしろ行爲者を外へと規定する表面的な決断の面にひきつけられ、また理由というものもヨリ一般的な価値のパターンで把えられたものとなる。従って、動機も理由も行爲者の内的経験の微視的な地平からひき出されて、外的原因の先行条件たりうるまでにヨリ外化されヨリ巨視化されるのである。<sup>25)</sup>

一個の人間行爲の説明という、一般的には微視的とみなされる問題においても、探究者の観点がヨリ巨視的な方向へ向う時、かかる問題はヨリ大きな問題のコンテキストのうちにおかれ、探究者は行爲の先行条件としてヨリ大規模な条件へと瞳をひろげるをえなくなることは当然なことである。一寸既述したように、「ブルータスがなせシーザーを殺したか」という小さな行爲の説明にも、当時のローマの政治状況、その背景にある社会経済的状况等の大規模な先行条件がふくまれて来る。だが、かかる大規模の先行条件だけでは小さな行爲の説明としては余りにも不充分的はずれであろう。<sup>26)</sup> 大きな先行条件が小さな初期条件と結びつけられてはじめて、かかる行爲の説明が成り立つのだと言わねばならぬ。だが、小さな初期条件を大きな先行条件とむすびつけるには、小さな先行条件——つまり行爲者の動機と性向と理由——を出来る限り巨視的にとらえるのでなければ不可能であろう。なぜなら、かかる先行条件を内的経験に属する微視的なものとして把えようとすればするほど、探究者は大きな先行条件を把える視点から遠のき、行爲者の立場のうちへと入って行かねばならないからである。巨視的に

とらえることは、逆に行爲者の立場をはなれ、行爲者の特殊的且つ微視的な内面性を抽象化してより一般的な外的事象としてとらえることにほかならない。小さな先行条件である動機・性向・理由は小さい初期条件である原因とわがちがたいほど客観化され一般化される。つまり簡潔に言つてしまえば、結局原因とみられるまでにその本来の性格を希薄化させるわけである。<sup>27)</sup>

図Ⅲで固定化的に示された説明の構成は、以上の如き考察が一応あきらかにしているように、行爲者の外へと超えて出て行くこうとする巨視的視点にささえられていたわけである。かかる視点は、行爲者の内へと下降して行くこうとする微視的視点と絶えざる対立緊張をしながら、歴史的行為の説明をより広い問題のコンテクストに位置づけ、歴史的説明のより全体的な構成への展望をひらいていふと言ふことが出来るであらう。かかる展望の有効性をたしかめるために、今回は一つの基本的な問題から簡単な反省を試みることにしよう。それによつて、却つて、これまでの究明の意味がより明瞭になることと思われる。

#### 四 レギュラリティ理論とレベル理論

既に第一節で指摘した実証主義的理論のことを時にレギュラリティ理論とよぶ。実証主義的理論は因果的説明に對して、原因なるものを包摂する法則つまりレギュラリティをもとめるが故である。このレギュラリティ理論は因果的説明を基礎づけようとする理論であつて、本来、原因による説明それ自体とは区別さるべきものである。ところで、この理論の方式は極めて簡單明瞭である。次のように図示出来る。<sup>28)</sup>つまり、法則と初期条件とから結果に関する陳述を演繹しようとするのである。法則に説明さるべき結果を包摂するわけである。だが、この

法則(I)  
初期条件(C)

∴説明さるべき結果(E)

理論の意図は実際上では裏返えされて、因果的説明には法則の前提が不可欠であるから、原因のあるところに常に法則を想定せねばならぬ、ということになっている。一体このような方式が人間行為の歴史的説明に関してどれだけの意味があるのであろうか？

「彼はシーザーを刺殺するよう彼の同志によって強要された」という因果説明があるとする。では、このような因果説明の大前提たる法則はどのように定立することが出来るのだろうか？ もしそのような法則が定立出来るとすれば、結局、ブルータスに関する法則であって、「ブルータスはかくかくのことをなすように彼の同志によって強要される時はいつでも、(whenever)、かくかくのことをなす」と言うような形でしか表わすことは出来ないであろう。もし法則命題というものが「……の時はいつでも」という陳述で代置されるものとするならば、我々はたしかにどのような複雑な因果説明に対しても、かかる法則代置陳述をなすことが出来る。だから、我々が「因果的」説明と述べたものについてすら、簡単に上のように図示することが出来る。また以下のように述べることが出来る。「ブルータスがかくかくの性向をもち、かくかくの理由でかくかくの動機にかられ、かくかくの原因で強要される時はいつでも、かくかくの行為をなす」このようにブルータスに関する特殊条件のすべてを含む法則代置陳述を作るとは可能である。とすれば、このような考え方は結局、一個人に関する一切の事柄を可能的にふくむというライブニッツの個体概念の考え方に帰着してしまうであろう。もしこのような可能的な個体概念の確定が法則と言われるなら、ただ一つのブルータスに対する個体法則と言わねばならなくなる。だがそれでは法則としての意味が全くなくなってしまおう。レギュラリティ理論の最大の難点は、以上の点にあると私には思われる。

法則命題とは本来は「……の時はいつでも」という陳述で代置さるべきものではない。かかる陳述で示される

$L, x (= \text{whenever} \dots)$   
| D, R, M | C |  
∴ A

ものは決して法則命題のみをさすものではないからである。しかしながら、もしこのような法則代置陳述が認められないならば、歴史における人間行為に対して法則を想定しようとすること自体がほとんど不可能だと言わねばならない。もし可能だったとしても、その一般法則命題が働くためには結局数限りないパラミーターが代入されねばならないから、再び個体法則というディレンマによびもどされてしまう。では一体なぜこのような難点にさらされざるをえないのか？

結論をまず先取して言ってしまうえば、レギュラリティー理論が難点にぶつかるのは、法則が存立する一般性のレベルと行為がなされるリアルな特殊性のレベルとの関係を、全く静的且つ形式的に包摂関係でとらえられると考えてしまったからである。歴史的説明の論理的構造の解明にのみとらわれて、かかる構造の成り立つ根拠を忘れた点にある。法則の存立する一般性のレベルは限りなき抽象化のプロセスをもって成立し、行為がおこなわれる特殊性のレベルは限りなき具体化のプロセスにおいて成り立っている。勿論、その具体化を記述するには、記号化という抽象化がほどこされねばならないことは言うまでもないが、両者の本来のプロセスの方向は全く逆なのである。行為がなされる特殊性のレベルは、その行為の深みを捉えようとすればするほど、行為者の心のなかに葛藤する諸々の心理的起伏のリアルな動きを示すために、ますます下降する。その認識は行為者の立場のうちへとヨリ深く分け入って、ヨリ徹視的に洞察の瞳をめぐらすことにほかならない。しかるに、法則の一般性のレベルはどこまでも言語記号の媒介を通して、個々の状況の具体性を抽象して人間行為の一般的なパターンを把握し、それをさらに一般法則化することによってのみ成立するものである。かかる抽象化的な見方は、たとえ限りなく徹視的な事象を対象としている場合でも、(たとえば量子物理学の場合のように)ヨリ巨視的な方向において成立する。もし事象の徹視性へと具体化の瞳をめぐらせるとすれば、もはやそこには一般法則を期待することは形容矛

盾であり、ただ微視的事象のこまかい個々の流れとそのありのままの認識があるだけであろう。

一般的に言って、経験科学における法則というものは、事象の中に観察される規則性を一般的な形式で表現せるものにほかならない。<sup>29)</sup> それ故、その規則性によって因果的説明を基礎づけようとしたレギュラリティ理論は、その一般的形式（その論理的構成）の固定化というレベルにおいては決してあやまっていはいないのである。微視的事象をヨリ微視的に把握しようとする立場においても、その把握を記述にまでもたらそうするには、不斷に流動する事象を記号的に固定化し抽象化しなければならぬ。況んや一般に経験科学の立場において、動的に展開する具体的な事象をヨリ明確にとらえようとすれば、この明確さへの希求は事象の流れを固定化せんとする。その固定化が規則性を把握せんとする抽象化と一般化によってなされざるをえないことは、経験科学の存在根拠に属することである。つまり、かかる営みなしには経験科学そのものが存在しえない。その限り、レギュラリティ理論が意図せることは正当であつたと言わねばならない。だが、それは事の半面の真理なのである。その固定化が規則性を把握せんとする抽象化と一般化によってなされざるをえないことは、裏返して言えば、多くの不規則性で織り成される具体的に特殊な現実性の地平から「隔り」をとることである。従って、かかる隔りをとることによって経験科学が存在しうるということは、経験科学の存在根拠が動的なものであることを意味しているわけである。ここに、隔りを動的に把握し固定化の地平をあきらかにする基礎的理論が、レギュラリティ理論に対して求められざるをえない所以がある。その理論を私はレベル理論とよぶ。再び歴史の問題に戻ってその大筋を描き出してみよう。

法則の定立は高度の抽象化によってなされる。抽象化が進めば進むほど、一般性のレベルはたかまり、現実性のレベルから隔って行く。別言すれば、抽象化が進むにつれて一般性のレベルがたかまり、問題のコンテクスト



は具体的で狭い特殊な視野をひろげてヨリ広くて一般的な視野Ⅱレベルにおいて組立てられる。特に歴史の問題においては、かかる抽象化は個々の歴史事象の流れを抽象してヨリ全体的な流れの像を法則として描き出そうとする方向において、文字通り、ヨリ巨視的な見方（或はヨリ全体化的な見方）と根本的に結びつく。たとえば、マルクス史観が描く歴史過程の全体的な法則は言うまでもなく、またある一定の時期にかかわる絶対的貧困化の法則とでも言うべきものも、限りなき抽象化と巨視化のプロセスによって構成されたものであることは言う必要もなからう。かかる法則はかようなプロセスによって濾過された抽象化的且つ全体化的な諸条件のもとにおいて存立するわけである。かかる諸条件をぬきにして、別言すれば、その存立する一般性のレベルを無視して、かかる法則を一挙に個々の現実の事象レベルにあてはめようとするならば、これは歴史認識を支えるレベルを混同する誤りに陥るものと言わねばならない。そのような誤りは却って法則そのものの存立をすらあやうくする結果となろう。

歴史の個々の問題について歴史的説明をなそうとする時、たとえば既に第三節で示したように、小さな一個の行為の説明にも大きな政治的・経済的・社会的且つ文化的な諸条件が問題となる。小さな条件と大きな条件を結びつける場合でも、モット一般的に言って、小さな問題を大きな問題のコンテクストのうちに位置づける場合でも、そこに働く抽象化と全体化のプロセスを自覚して一般性のレベルの安易な混同をさけるようにつとめねばならない。<sup>30)</sup>歴史認識において、歴史事象の最低のレベルから高度の抽象性のレベルまで、言わば限らない一般性の階段がある。そのレベルは結局、探究者の視点と歴史的現実との関係に對して相関的である。歴史的探究者の視点がヨリ微視的になればなるほど行為者の立場へと下降し、狭い具体性のレベルの問題にかぎられることとなるが、探究者の視点がヨリ巨視的になればなるほど、傍観者或は批判者としてその視野がひらけるが、全体化が

進むにつれて歴史の全体を自らの視野に入れようとするがために、その視点は必然的に歴史の内の位置から歴史の外の位置へと移行せざるをえない。結局、歴史的説明というものは、歴史の外へと超え出て行こうとする巨視的視点と行為者の内へと下降して行こうとする微視的視点との、絶えざる対立緊張と往還運動によってダイナミックに展開されるものと言うことが出来るであろう。

私は歴史における行為の説明の問題を考察しながら、最後には歴史的説明一般の問題に大きく踏み込んでしまった。そのために、こまかく具体的に論じようと意図しながら、結局、抽象的な段階にとどまらざるをえなかった。しかし逆に言えば、そのために、歴史的説明の問題に対する一般的な展望を与えたのではないかと思われる。その展望からの具体的考察は別の機会に行うことにしたい。

- (1) P. Gardiner ed.: Theories of History (1959) ① Bibliography がよくまとまっている。
- (2) R. G. Collingwood: The Idea of History (A Galaxy Book), p. 214~5.
- (3) その中で特に、全体と部分との関係から問題になる「所謂「意味説明」が一番問題となろう。だが、大体において、分析哲学的な考え方は方法論的個体主義 (K・R・ポッパー) から、その問題を無視或は軽視する。
- (4) P. Gardiner: The Nature of Historical Explanation, 1952, p. 114.
- (5) J. Piaget: La Psychologie de l'Intelligence, 1952 知能の心理学 (波多野完治・滝沢武久訳) 一一頁
- (6) C. G. Hempel & P. Oppenheim: The Logic of Explanation, in: Readings in the Philosophy of Science p. 327~331. c. f. C. G. Hempel: The Function of General Laws in History, in: Readings in Philosophical Analysis p. 459~60.

(7) G. Ryle: The Concept of Mind, 1949, p. 86~9.

(8) W. Dray: Laws and Explanation in History, 1957, Ch. V p. 118~155.

- (6) R. Peters: Cure, Cause and Motive, in: *Philosophy & Analysis* ed. by M. Macdonald. p. 153.
- (7) c. f. P. Winch: *The Idea of A Social Science*, 1958. p. 81~2. 拙論「倫理的価値問題」の探究の基礎(哲学雑誌)
- (8) c. f. R. Lepley ed.: *The Language of Value*, 1957.
- (9) c. f. E. M. Adams: *Empirical Verifiability Theory of Factual Meaning and Axiological Truth*, in R. Lepley, op. cit. p. 98~104. なる語彙 W・トマスに於いて「記述的—正統的探究」の方向を規定する。
- (10) R. Peters: *The Concept of Motivation*, 1958, p. 3~9.
- (11) 小心理学辞典に於いて (A Dictionary of Psychology by J. Drever) 行為の方向を規定する際に働く感情的一能動的ファクター (an affective-convative factor) と定義されている。
- (12) かかる意味で、ヘンパシー理論がとらえられるのは極めて論理的だと言わねばならぬ。c. f. R. G. Collingwood; op. cit. p. 286 ff.
- (13) L.S. Stebbing: *Philosophy and the Physicists*, (Pelican Edition) p. 181.
- (14) このようになること、また、J・P・ステビンが言うように、動機は行為と直結し、一体化してゐると言えるわけである。
- (15) 我々は色々な観点から両者の区別を考えることが出来るが、(たゞ、S. Toulmin: *The Logical Status of Psychoanalysis*; A. Flew: *Psychoanalytic Explanation*. 共に M. Macdonald ed. op. cit. 所収参照) このやうな観点をなす窮極的にバック・マップしているものが、かような徹視の見方と巨視の見方の動的な根拠のように思われる。
- (16) R. S. Peters: *The Concept of Motivation*, p. 33.
- (17) 分り易く言うこと、行為者の性向がヨリ明確にきめられればきめられるほど、その性向に反しておくる諸々の動機が捨象されて、性向と動機とが直結し一体化される。その結果、探究者の視点に依じて、動機が性向となり性向が動機となる。
- (18) R. S. Peters: op. cit. p. 31.
- (19) c. f. S. Toulmin: op. cit. p. 138.
- (20) 分り易く言うこと、行為者の性向がその人格性において価値的にきめられればきめられるほど、その性向に反する諸々の正当化的理由が捨象されて、一般的な価値のパターンにおいて両者が直結してしまう。その結果、性向が理由となり理由が性向となる。
- (21) リンゴが木からおちるといふことは、我々の認識とは関係ないところでは、ただ、そのあるがままの自然現象である。

ところが「なぜリングが木からおちたのだ」と問題をおくことによって、「風が吹いたから」、「リングが熟したから」というような日常経験のレベルから、はては「万有引力にひかれて」となどという物理学的な問題レベルにまで達するのである。

(25) 私が構成したモデル・ケースも、既に相当の程度に外化され巨視化されたものであることを、ここで一寸指摘しておく。

(26) このようなおおまかな説明が、歴史学ではよくなされるわけであるが、それは歴史記述上の便法であれ、決してこのましいことではない。両者の間のギャップをうめるように努力することこそ、歴史家のゆるがせにすべからざる仕事であろう。

(27) 具体的に言うと、シーザーを殺したブルータスの行為の原因のなかに彼の動機・性向・理由がふくめられてしまうことである。その結果、ブルータスはシーザーを殺すものたちの一般的な代表（或は象徴）として典型化（或は類型化）される。

(28) C. G. Hempel & P. Oppenheim: op. cit. p. 322.

(29) 沢田允茂「社会科学と法則性の問題」（思想一九六二・二 一頁）

(30) A. M. MacIver: *Historical Explanation*, in: *Logic and Language* 2nd Series ed. by A. N. Flew, 1955 p. 189, p. 191~200.